

武蔵野市第六期長期計画策定委員会 作業部会（第15回）

日 時：令和元年11月21日（木） 午後6時30分～午後7時51分

場 所：商工会館5階 第1・第2合同会議室

出席委員：小林委員長、渡邊副委員長、大上委員、岡部委員、栗原委員、中村委員、松田委員、保井委員、笹井委員、恩田委員

欠席委員：久留委員

1. 開 会

企画調整課長が、作業部会の趣旨と進め方について説明した。

2. 議 事

企画調整課長が、令和元年11月5日、12日、13日に開催された第六期長期計画審査特別委員会の概要について、各会派の討論の内容を中心に説明した。

（1）長期計画の策定方法等について

企画調整課長が、主な論点と各委員の意見の概要について説明した。

①委員会の運営・進行について（期間・回数・意見交換など）

【委員長】 委員会の開催回数は、私はこれでよかったと思う。

武蔵野市の長期計画策定方法は特殊で、理解するまでに時間がかかる。私は、第五期長期計画・調整計画の策定委員をしたとき、全部を終えてからでなければわからなかった。長期計画の策定方法について、事前に理解してから委員会の第1回を迎える形で進められるとよかったと思う。

【副委員長】 今回は、討議要綱公表後に様々な意見を踏まえ、7月の1カ月間で集中的に議論した。事務局や各関係部署が一斉に動いている状況では、なかなかできない議論もあり、誰にとっても厳しいものがあつた。回数をこれ以上増やすと、委員の社会生活上に支障を来す懸念があるし、減らすと、議論の積み重ねを薄めることになる。策定の期間を延ばすと、ゆとりを持たせることはできるかもしれないが、計画が終わった翌年には次の計画策定を始めなければならなくなる。市長選挙に合わせて改定するという事情はよく

わかるが、4年ごとの改定という単位はもう少し柔軟に考えたほうがいい。6年または8年ごとの改定でもよいのではないか。

【委員長】 企画調整課が行政の全体を見渡し、市民参加の前線に立って取り組むのはとても大事だ。全体が見えていないと、どこにエネルギーを注げばいいかがわからないが、一方で実質4年間で回すために、企画調整課はひたすらこの計画策定にかかわることになる。他の自治体の企画調整担当課が新しいことに挑戦しているのを見ると、武蔵野市の企画調整課は長期計画にかかわり過ぎていている気がする。

【A委員】 ただ、企画調整課は、長期計画をつくることで、担当かと議論し情報を集め、自分たちの意見も打ち出せた。武蔵野市の企画調整課は、ほかの地方公共団体以上に現場の情報を持っていると言える。

【副委員長】 職員の学習効果が大きいという点は重視できる。一回もまれて、大変な思いをしつつも、いろいろな状況がわかって次の部局に行くことになり、ジェネラリスト型の職員の育成になる。ただ、今後職員が必ずしもジェネラリストだけではなくなる可能性もある中で、そのあたりの運用も含めて考えていく必要がある。

【B委員】 費用がかかっても、長期計画策定の年度だけ、例えば担当課長や専従チームを置いて、選挙や市議会定例会で策定作業がとまる期間をなくすことはできないか。

【企画調整課長】 長期計画の策定期間中は企画調整課の人数を増やしてもらっている。担当課長をつけると、分業はできるが、企画調整課としての全体の視点が薄れる恐れがある。

【委員長】 私は、第五期長期計画・調整計画のときは、議会对応に抵抗があったが、今回は意外と平気だった。市長と議員の間に入れるのは市民以外にいない。その点、これはよくできたシステムだ。

【企画調整課長】 策定委員の皆様が対市民、対議員の意見を聞き、我々の部局とも真剣に意見交換をしていただいたことで、多くの市民意見が反映されたと思う。

【C委員】 市民会議について。市民会議委員に応募するに当たって書いた作文「10年後の武蔵野市に必要なこと」は、10年後に向けてのビジョンがそれぞれの思いで書かれている。それらの作文をシェアして、議論する時間をとってもよかったのではないか。

また、評価については、策定委員になったばかりの時点で過去5年なり10年の実績を評価することは非常に難しい。行政の方たちの評価とあわせて、市民サイドの評価が入るような仕組みを考えてほしい。

【A委員】 策定委員として市議会や市長に対するとき、最初は怖いという

意見も委員会の中にはあったが、議員と策定委員の立場の違いがわかっただけ、あとは武蔵野市をよくするために市民として信じる道貫けばいいだけだったので、ある意味、純粹でいられたし、意外と楽だった。意見を聞いて、最後は委員会で決めるというセーフティが残されていたのもよかった。

今年 10 月、西尾勝先生の武蔵野方式についての講演を聞きに行ったのだが、大変おもしろく、勉強になった。長期計画はどういうものか、あるいは長期計画というシステムが武蔵野市でつくられてきた背景を市民の皆が、知らな過ぎる。策定委員就任のときに、策定委員に説明すれば事足りるというものではない。それが武蔵野市の市民自治なんだということがわかるところまで、市民教育を実施していく必要があるのではないかと。

【企画調整課長】 今は策定委員を在住市民に限ってアプローチをしているため、依頼するととても負担が大きいと思われると思うと、受けていただけないのではないかと危惧してしまう。

【A 委員】 武蔵野市は人材が豊富であり、そこが武蔵野市のポテンシャルだと認識している。また、委嘱された人たちは、議会や市長との議論に対して、不安はあるものの、割り切って取り組むことができる。そこは心配しすぎることはない。

【C 委員】 今回取り組まれた無作為抽出ワークショップのような形のものを、長期計画に限らずもっと増やしていくことで、長期計画にかかわる市民も、徐々に増えていく。いろいろな個別計画にかかわってもらうことで、計画について一緒に話し合い、考える人たちを増やして欲しい。この仕組みは今後も大事に続けていくべきだ。

【委員長】 文化振興基本方針の策定のときも、ワークショップ、説明会のようなものを開催したが、人は全く来なかった。来てほしい人に届いていないということもあったと思われる。また、開催日時も、平日の夜や土日がいとも限らない。難しい課題だが、よりよい方法を考え続けてほしい。

②作業部会の必要性（議事の公開）について

【A 委員】 作業部会は非公開であるべきだ。策定委員は、選挙で選ばれているわけではないし、自分の良心に従うしかない中では、公開しにくいこともある。特に、施策によって自分たちの私権に侵害が起こるかもしれない人たちがいる前では、どうしても議論に偏りが出てしまう。全て公開するのが理想ではあるが、一定の使い分けをしていかなければ、客観的な議論の実効性を担保できない。

議事録を公開して、それで議論の過程を見せるにとどめた方がいい。その際、発言者の特定につながることを十分に配慮する必要もある。

【C委員】 非公開にせざるを得ない部分があるとしても、基本的には公開して、話のプロセスを見せたほうがいい。今回、策定委員会での議論を受けて3回作業部会があり、その次の策定委員会では、案が固まったという形で議論が進んだことがあった。それでは、傍聴する側にとっては、自らが出した市民意見がどう議論されたのかというプロセスが全くわからない。

私は、ここでの議論はとても勉強になったし、たくさんのことを教わった。傍聴者アンケートに同じようなことを書いている人もいた。議事録では伝わらない臨場感のようなものを体験できるのも、ある種の豊かさではないか。

【委員長】 非公開の作業部会でなければできない議論もあったが、全てが非公開でなければできない議論だったわけではないように思う。ただ、議題によって公開、非公開を決めると、せっかく傍聴に来た人たちにお断りせざるを得ないことにもなる。非公開の作業部会と、公開の委員会を使い分けることは難しいが、地域的に問題になるようなこと、対立の加速が懸念される問題以外は公開にするという方法もあるのではないか。

【副委員長】 時間に余裕があれば、問題を切り分けて、特別部会をつくることもできるが、走りながら全ての問題を出していかざるを得ない状況では、計画策定の終了時点から逆算して、ここまでにこの議論をしなければいけないということを積み重ねていくしかない。どちらで話し合えばいいかわからないものは、安全を見て全て作業部会とせざるを得ない。できるだけ公開しつつ、その前提条件をつくったほうがいい。

【A委員】 良識の範囲で自分の考えを言える策定委員とは違って、市の職員は説明責任がある。しかし、全てを説明することにも限界がある。策定委員会が全部公開になったら、行政側の人たちは本音で議論できないだろう。行政側の立場も配慮すれば、作業部会の回数は今より増えると考えたほうがいい。

③策定委員の「市内在住」の要件について（在勤を含めるかどうか）

【A委員】 住民ではなくても、行政サービスの対象である在勤・在学の人々の意見も聞くべきだ。ただし、市税を払っていない、財政負担をしていない人たちに、市の財政支出に結び付く計画の決定権を渡すのはおかしい。

【B委員】 市民以外の委員で、専門性の高い方を選んでしまうと、あらかじめ決めた方向性に話が持っていかれてしまうのではないか。市民でも偏った意見をお持ちの方が策定委員会に入る可能性はあるが、市民という枠は残したほうがいい。

【D委員】 市の将来像を模索するのが長期計画であり、それを担うのは市民なのだから、全員が住民であってももちろんいいが、住民でない市民を入

れるのは、何ら排除すべきことではない。将来、市内で働く外国人が増加する状況もあり得る。いずれにしても、特定分野で有名だからというように、武蔵野市に縁もゆかりもない人を委員にするのはやめたほうがいい。

【E委員】 まちづくりなどの計画をつくっていると、住民と、広い意味での市民の視点は、時に対立する。在住の市民だけで決めるというよりは、市民の定義を広くして、または枠を決めるなどして、別の視点を入れるという方向があってもいい。住民だけでは、将来像に向かいにくい。

④策定委員を経験した上で、市、事務局、市民に期待すること

⑤その他

【副委員長】 市は、個別計画との整合性をどう図るかに苦心し過ぎていないか。整合性を図ると、長期計画が個別計画を追認する計画にならざるを得なくなる。同時に、個別計画の次の計画策定の指針をつくる計画でもあるので、そこは位置づけなくてはならない。長期計画という性格を考えて、あり方を変えていく必要がある。

【A委員】 武蔵野市役所で自分の理想とする市政を実現したいと意欲を持って入庁した若い人たちの芽を摘むことのないようにしなければいけない。30年後に、自分は市の職員として、この武蔵野市をよくするためにこれだけの足跡を残した、それが今の武蔵野市の繁栄になっているんだと思えるような市役所であることが、武蔵野市民が望むこと、住む人がこのまちで家を買ってよかったと思えることにつながる。市の職員が新しいことにチャレンジできる職場環境を用意するためには、市職員の幹部の意識も変えていく必要がある。同時に、住民もしくは市民の意識の醸成を図ることも求められる。市民が市役所に対して上から目線ではなく、対等なパートナーとしてやっていくというコンセンサスをつくることが何よりも重要だ。

【E委員】 市職員は今の部署の立場でしか参加できない感じになっており、市民は行政サービスを受ける個人としてしか参加できない。そこは打開できないものか。

所属部署の施策を整理して、次にやることはこれだというものを計画に上げるだけでは、分野を超えた取り組みはできない。今、国では若手職員からの提案を受けるということを始めている。武蔵野市も、未来を担う職員が、個人として、あるいは部局を超えたグループとして、次の長期計画にはこれを入れたいと提案し、それを入れられるかどうかを検討する仕組みがあるといい。

また、市民意見については、今のやり方だとお願いしに来る市民の意見だ

けになってしまう。策定委員会が団体や企業、学校等に目的を持って意見を聞くよう出向いて行って、次の 10 年は何に取り組むべきか、市民側から吸い上げるようなこともしたほうがいい。

最後に、都市基盤分野は半分以上「まちづくり」がテーマであったので、次回は分野の名称について検討する必要がある。。

【C 委員】 市民会議や計画づくりの枠組みは、行政主導だ。私たちは市民なので、基本的に市民の立場で物を言う。行政の人たちのことを理解しようと思えば、行政の人たちと、行政の人は本当はこんなふうに思っているということ話を話し合っ理解していくしかない。対話とか協働のツールのようなものがなければ、市民は市民の立場、行政は行政の立場で、お互いにわかり合えないままだ。一緒に話し合っいける組み立てを今後つくっいけないものか。

【委員長】 C 委員が言ったことは理想ではあるが、枠組を行政が作った時点で、それは行政主導になってしまう。行政が用意した仕組みの外側、個人的なつながりのようなところでないとできないことなのではないか。

【F 委員】 こちらから出向かなければ聞けない意見もある。意見の聴取の仕方を変えないと、言いたいことのある人の意見しかとれなくなる。

また、長期計画で扱うには余りにも具体的過ぎる内容もあった。本来、政治的判断なのか、個別計画なのか、少なくとも長期計画の策定委員会で議論すべきことではないことが扱われていた。長期計画は、抽象度の高いところをしっかりと扱うものではないか。

【B 委員】 私は、最後の最後まで、書いたことはやるが書いていないことはやらないという、書く書かない問題に振り回された。第六期長期計画審査特別委員会においても、そのような言い回しで話が進んでいた。長期計画条例の第 2 条第 4 項の書かれ方が足かせになっている。これがあるために、10 年先の大きなことを実際に策定したり、話し合ったりができない状態になっているように感じた。

【G 委員】 私も、特別委員会で議論になった個別計画と長期計画の関係性、つくり方に悩み続けた。市は、積み上げ方式で、個別計画を重視した形での計画の策定の経過をたどる。第一期のころは、個別計画を長期計画でつくっていた。策定委員の議論と市長との関係でつくり上げ、5 本の大きな施策にしていた。その後、法律や補助金等の関係で、個別の計画が必要になり、気がつくとも 60 本もつくっている。このような状況で、長期計画の役割は何かをもう一度よく考える必要がある。条例がある以上は、大綱、施策、その基本理念をもっと議論すべきだ。

市民から具体的な案件が持ち込まれる場合もあるが、長期計画で議論すべ

きものではないのであれば、そのように伝えられるのが望ましい。

【H委員】 第六期長期計画審査特別委員会では、「市民」なのか「住民」なのか、「地域」という言葉もあわせて、整理ができていないという指摘を受けた。今まで「市民参加」と言ってきたものは、市内在住・在勤・在学の方の参加なのか、「住民参加」という言葉にして、税負担をされている在住の方だけの参加にするのか、言葉の意味と意義を整理する必要がある。

書く書かない問題は、個別計画との整合性をどうするかという問題がどうしても出てくる。それには職員の対応の仕方と市民の教育という2つの課題がある。職員は、「ここに書いていないからやりません」と言うのではなく、時代の変化が激しい中で、書くこと書かないことの意味をいま一度考えてほしい。市民の皆さんも、「市の職員は、長期計画に書いていないことはしない」と考えず、緊急に市民のニーズとして取り上げていくべきものがあればともに考えるよう、参加協働の関係をお互いにきちんと取り結ぶ必要がある。

第五期長期計画のときは、この計画は議会の意思が反映されていない、今後の実行に当たっては議会とよく相談することという趣旨の附帯意見をつけての賛成だった。今回はそういう附帯意見もなく、全会派の賛成をいただいた。その意味でも議員参加・市民参加・職員参加は成果があった。

(2) その他

企画調整課長が、計画は12月の市議会定例会の議決を得た後、年度末に印刷、刊行となることについて説明し、委員長の閉会宣言により、武蔵野市第六期長期計画策定委員会の全会議を終了した。

以 上